七世紀の大王宮周辺空間

古内　絵里子

はじめに

大王宮周辺空間には王権の形態や政治システムが如実に現れる。そこで本稿では、7 世紀の大王宮周辺空間を考察しその変遷を捉え、倭国が律令国家へとどのように変化していったのかを明らかにする。まず『日本書紀』（以下『書紀』）を中心に文献史料から大王宮周辺空間の存在を証明する。そしてその実態を文献史料・発掘資料の両面から浮き彫りにしたい。

1. 推古～皇極朝の大王宮周辺空間

推古大王の即位をもって飛鳥時代がはじまる。しかし推古が即位した豊浦宮[1]・その後政をとった小墾田宮[2]ともに小墾田地域に営まれ、ほとんど土地利用が行われていない。（図 1 参照）また、この頃の政治体制は大和朝廷を構成する有力な豪族（氏族）が氏族ごとに定まった仕事を分担しながら、全体として朝廷の運営にあたっていた。よって仕事を進める際は、氏族が単位となり、人や組織はそれぞれの氏族の所に分散していた。したがって天皇の居るミヤコ自体はそれほど大きくなくとも事足りた[3]。このことからこの時期大王宮周辺空間には官衙・豪族宅などは形成されてないと考えられる。

次の舒明朝になって初めて飛鳥に大王宮―飛鳥岡本宮を置く。しかしわずか 6 年後、蘇我氏からの独立を企図して推古以前の大王宮が集中した磐余地域で百済宮・百済大寺の造営に着手する。このことから飛鳥という地域を意識的に支配拠点整備を行っていないことがわかる。皇極朝では再び飛鳥に大王宮―飛鳥板蓋宮（以下「板蓋宮」）を移す。板蓋宮の構造はまだはっきりと確認できないが、まだ官衙は形成されてないと推定できる。また豪族の集住も史料からうかがえない。皇極紀で確認できる他の宮・豪族邸は、軽皇子の「三嶋別業」、山背大兄王の「斑鳩宮」、蘇我蝦夷の「畝傍家」「上宮門」（甘樫岡）入鹿の「谷宮門」（甘樫岡）、翹岐の「百済大井家」であり、分散していることがわかる。以上三朝では、まだ支配拠点としての大王宮周辺空間の整備は行われてない。

2. 孝徳朝の大王宮周辺空間

難波は、古くから朝廷の支配行われていた地であり、6 世紀中期に整備された国家的港津である難波津、大郡・難波館などの外交関連施設・迎賓館、西国を支配するための官衙である小郡、難波に集散する物資の収納・管理・運送するための難波屯倉などの朝廷施設が存在していた。また物部氏の「阿都別業」「難波宅」「渋川家」、蘇我氏の「豊浦大臣の大津宅・倉」などの豪族宅、四天王寺などが『書紀』にみえ、大化前代から要所であった。

そこで、孝徳大王は大化の改新と呼ばれる一連の改革の一環として難波に新たな大王宮―難波長柄豊碕宮（以下「豊碕宮」）を造営し遷移する。この豊碕宮では従来の宮にはなかったのちの朝堂院のような空間、外郭部分が検出されている。（図 2 参照）この外郭部分の内裏東方遺跡の存在から小澤毅氏[4]は毎日官司のある宮に勤務したため、その近辺に居住したと考えている。これを裏付けるように『書紀』白雉 4 年（653）条には「太子請曰、欲冀遷－于倭京－。天皇不ㄴ許焉。皇太子乃奉－皇祖母尊・間人皇后并率皇弟等－、往居－于倭飛鳥河辺行宮－。于時、公卿大夫百官人等皆随而遷。」とあり倭京に中大兄王子以下王族が遷ることに際して、公卿大夫百官人も移っている。飛鳥では、基本的には各職務を世襲する有力豪族が各自の本拠地で実務を執っていたのに対し、豊碕宮では諸豪族が本貫地から離れて政務を執ることを前提とし、内裏周囲の官衙区画で政務を運営したと考えられる。これにより、豪族・官人らの多くが遷都にともない移住を余儀なくされ、ここに支配拠点として豪族が集住する大王宮周辺空間が形成された。

では、豊碕宮周辺は具体的にはどのような空間だったのか。まず、積山洋氏[5]は「難波大道」を中心としてこれに交差する東西道路網の存在があり京域が形成されたとし、それを「前期難波京」と呼んでいる。井上和人氏[6]は現状では、まだ遺構情報がきわめて断片的であり、宮城の周辺に正方位をとる建造物群が造営されていたとみる。それに対して山中章氏[7]は「のちの条坊制のような規格性をもたない。（中略）「難波大道」が整備されて、支配者階級だけでなく、行政的機関の事務を担う人びとや、物資の保管、運搬などに従事する人びと、造寺事業を支える工人群など、さまざまな階層の人びとが展開したであろうことは容易に想像がつく。しかしそれらは宮城や新幹道路周辺に散在するにすぎない」と考察している。先行研究をみてみると、積山･井上両氏は考古学上から正方位をとった大王宮周辺空間を提唱している。しかし孝徳朝難波の所在地は現在の大阪市中心部にあたり、遺跡だけでその実態を把握するのは難しい。そこで史料からも検討を加えてみる。

まず、孝徳朝難波には『書紀』にみえるように子代離宮、蝦蟇行宮、小郡宮、難波碕宮、味経宮、大郡宮があった。これらの「宮」の関係については、子代離宮＝小郡宮、味経宮＝難波長柄豊碕宮とし、難波遷都の過程を基本的には小郡宮から難波長柄豊

碕宮へと二段階とする説がある[8]。まず、難波小郡（小郡宮）の所在は『書紀』敏達12年（587）条「復遣大夫等於難波館。（中略）乃営館於阿斗桑市、使住日羅、（中略）日羅自桑市村、遷難波館。（中略）天皇詔贄子大連・糠手子連、令収葬於小郡西畔丘前。」とあり「小郡」の西は畔、つまり難波津に近い上町台地の東部分にあったと推測できる。この小郡は『書紀』大化3年（648）条とあるように「是歳、壊小郡而営宮。」壊して小郡宮を造営している。また、子代離宮＝小郡宮との説から大化2年（646）正月条に「是月、天皇御子代離宮。（中略）或本云、壊難波狭屋部邑子代屯倉、而起行宮。」とあり、難波狭屋部邑子代屯倉は『和名抄』に摂津国西成郡讃楊郷（大阪市中央区高津）にあると推定され、その所在は豊碕宮の東南の上町台地の東側にあたり、ここに小郡宮があったと考えられる。味経宮＝難波長柄豊碕宮の所在は難波宮跡と所在が確定している。蝦蟇行宮・大郡宮（難波大郡）の所在は判明していないが上町台地にあった可能性は高い。

また孝徳難波には難波館[9]、幹線道路である難波大道[10]、そのほか住吉津の南にある榎津近辺では、依羅屯倉や7世紀前半頃の大型掘立柱建物の遺構などが検出されている。方格地割が存在したかは明かではないが『書紀』には孝徳朝に大規模な難波整備[11]が行われたとある。

以上、孝徳朝難波は豊碕宮から南に向かう難波大道が上町台地の中心を通り、宮の近くの東側の小郡宮（難波小郡）さらに豊碕宮から南に約2km離れた難波大道の東沿いに四天王寺があり、そこから南に約2km南に行くと大和川沿いに7世紀の大型掘立建物、また豪族宅と思われる遺跡などが見つかっている。ただ間の空白部に何も無かったとはいえない。なぜなら、この部分は現在の大阪の中心部であるため、発掘調査ができないからである。現状では難波大道を中心に大和川を南限とした範囲に寺院・宮・豪族宅などが営まれたと考察するにとどめておく必要がある。

3. 斉明朝の大王宮周辺空間

斉明朝になると再び飛鳥に大王宮を置き、さらに『書紀』斉明2年（656）条[12]にみえるように飛鳥を大規模開発し荘厳化をはかった。またこの時期『書紀』に「倭京」という語がみえる。孝徳朝難波の影響により飛鳥にも「倭京」という大王宮周辺空間が形成されたと考えられる。では「倭京」とはどのような空間だったのか。先行研究[13]をみてみると漠然とした範囲から明確化した範囲を示す見解まで様々なものがあり、その成立時期も推古朝から天武朝までまちまちである。ただし、『書紀』に「倭京」の語が初出したのは白雉4年（653）条であること、斉明2年条で一斉に飛鳥とその近辺の整備をおこなっていること、また近年の発掘調査でそのことを示す遺跡が複数見つかっていることなどから「倭京」の成立は斉明朝にもとめられる。次にその範囲については『書紀』斉明5年（659）7月庚寅（15日）条に「庚寅、詔群臣、於京内諸寺、勧講盂蘭盆経。」とあることから、倭京内に少なくとも「諸寺」―複数の寺院が存在しており、この時期に確実に完成し、機能していた飛鳥近辺の寺は、飛鳥寺と豊浦寺があげられる。したがって、飛鳥地域だけでなく小墾田地域も倭京と呼ぶことが明らかとなり大化前代より大王宮周辺空間は拡大している。また「狂心渠」と考えられる飛鳥東垣内遺跡は、発掘調査により運河と考えられる幅数十mの溝跡を検出し、その溝は酒船石遺跡跡の東側から、飛鳥東垣内遺跡を経て奥山久米寺の西側まで達すると考えられている。そして斉明朝の方格地割は山田道を越え奥山久米寺付近まで広がっていた[14]とみられている。以上から斉明朝では山田道を越えた北の地域まで大王宮周辺空間が拡大した倭京という空間が形成された。（図1参照）

また、この時期設置された漏刻台について木下正史氏[15]は時刻、暦、天文、占などの仕事を合わせて行う律令制下の陰陽寮にあたるものがすでに成立していた可能性が高いとし、斉明大王の後飛鳥岡本宮から離れた場所の官衙施設の所在を指摘する。また今泉隆雄氏[16]は時刻制の導入は官人・庶民の倭京への集住が前提であることから、この時期集住がより進んだとみている。また後飛鳥岡本宮（以下「後岡本宮」）には豊碕宮の構造を引き継ぎ、外郭部分が検出されており、この部分に官衙が存在した可能性が高い。したがって斉明朝飛鳥は大化前代にはなかった官衙の大王宮周辺の集中があり、それにともなって拡大した大王宮周辺空間―倭京が成立した。これは氏族制の政治体制からの転換が図られたことを表すものといえる。

4. 天智朝近江京

天智朝になると、白村江の敗戦を受け防衛対策のため近江京[17]に遷都する。従来、その遷都要因は防衛のため内陸の大津へ遷都したと消極的に捉えられていたが、敗戦を受け防衛と中央集権制の必要性を痛感した朝廷が豪族の官僚化を図るため倭京から離れた地に都を移すことが目的とした積極的な遷都といえる。大津は難波と異なり長年にわたる大王家の開発地ではない。つまり近江京は一から造られた大王宮周辺空間といえる。史料をみると「大海人皇子宮」（『書紀』の「大皇弟第」）、「大友皇子宮」[18]、「藤原鎌足宅」（『藤氏家伝』の「淡海之第」、『書紀』の「藤原内大臣家」）、さらに『書紀』天武紀に「京内群臣」とある。また大部分の豪族の本貫地がある大和国から近江大津宮に通うのは不便であることから宮周辺に住んでいたと考えるのが自然である。加えて、それを支えたとみられる瀬田丘陵生産遺跡群[19]が発見されている。大津遷都以前から存在した穴太廃寺は遷都とほぼ同時期に大津宮と同じ方向に再建立されていることが遺溝から判明している。そのことから

林博通氏[20]は正方位の大王宮周辺空間を想定している。井上氏[21]は「大津宮を取り巻くかなり広い範囲の中に、正方位をとる寺院や、場合によっては道路が想定された」としている。ただし現在、道路遺構が検出されてなく、先行研究では寺院跡の関連遺構やその周辺に残る道、畦畔らから方格地割を復元しており、当時地割があったのかは明確ではない。ただし、寺院・宮跡は全て正方位をとっており、難波同様大津宮の中軸を通る旧北陸道の沿線に正方位をとった寺院・豪族宅があったと現段階で考えられる。

おわりに

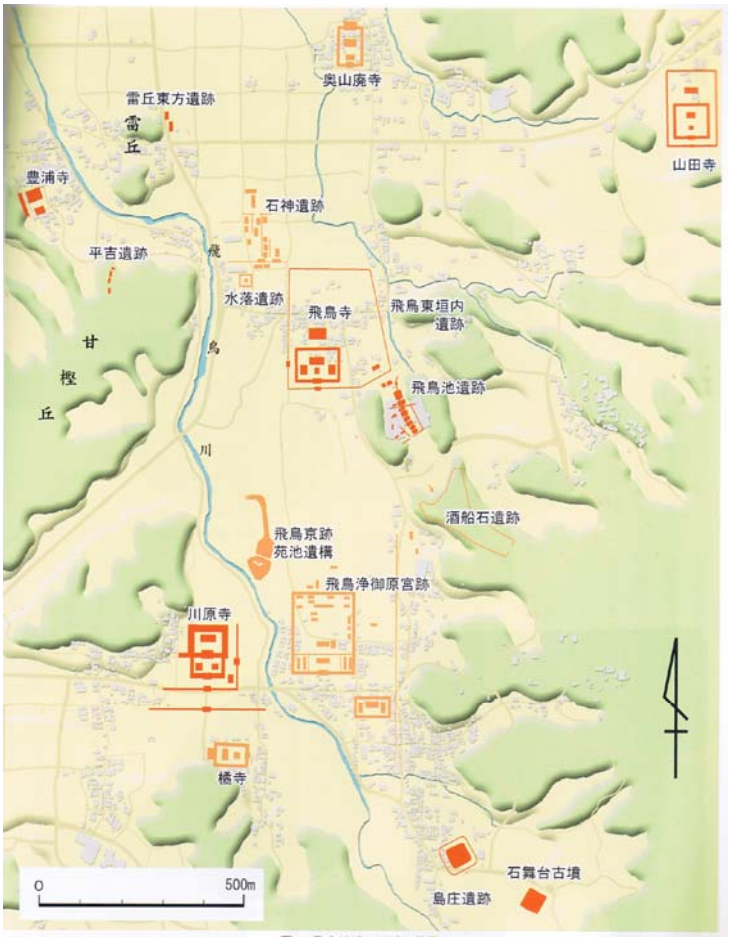
以上から 7 世紀大王宮周辺空間をみてみると（1）大王宮の支配拠点としての明確な周辺空間の形成は孝徳朝であること（2）孝徳朝と天智朝近江京の大王宮周辺空間が似通っていること（3）孝徳朝以降の大王宮周辺空間の施設がほぼ正方位をとっていることが挙げられる。これは 7 世紀、倭国が中央集権国家を進めていく過程の現れといえる。特に孝徳朝から大王宮周辺空間の形成がはじまることから大化の改新とよばれる諸改革が大きく関わってくると考えられる。今後の課題としてはこの改革と大王宮周辺空間の形成がどのように関わっているのかを考察するとともに、この空間が天武朝でどのように変化して藤原京形成につながっていくのかみていきたい。

注

1. 昭和 60 年（1985）の発掘調査で、豊浦寺「講堂」基壇の下層から石敷をともなう掘立柱建物の一部を確認。遺構はごく一部しか調査されておらず、全貌は不明だが出土した土器の年代や石敷をともなう遺構から豊浦寺の下層に重複して存在する可能性が強まった。
2. 飛鳥川右岸の雷丘周辺で発掘された井戸跡から「小治田宮（小墾田宮）」と墨書した土器がみつかっている。土器の年代は 9 世紀初頭を示していて、推古朝とは時間的な隔たりがあるが、宮の位置がさほど大きく動くとは思えない。『日本霊異記』にも「雷丘の注記として「古京小治田宮の北にあり」とあることから雷丘東方遺跡は小墾田宮とみなす。
3. 寺崎保広「藤原京の形成」山川出版社、2002 年
4. 小澤毅「古代都市「藤原京」の成立」（『日本古代宮都構造の研究』、青木書店、2003 年、初出 1997 年）
5. 積山洋「孝徳朝難波と造都構想」（塚田孝編『大阪における都市の発展と構造』山川出版社、2004 年）
6. 井上和人「古代都城建設の実像―藤原京と平城京の史的意義を問う」（『古代都城制条里制の実証的研究』学生社、2008 年、初出 1985 年）
7. 山中章「古代宮都成立期の都市性」（佐藤信・吉田伸之編『新体系日本史 6　都市社会史』山川出版社、2004 年）
8. 古市晃「難波」『歴史考古学大辞典』（吉川弘文館、2007 年）
9. 『書紀』推古 16 年 6 月壬寅朔丙辰（15 日）条に「六月壬寅朔丙辰、客等泊_于難波津_。是日、以_飾船卌艘_、迎_客等于江口_、安_置新館_。」とあることから津は江口より内側（東方）にあり、津に接して館があったとする見解がある。また筑紫の那津にある館（筑紫鴻臚館前身施設）も海沿いにあることから妥当な見解といえよう。また『書紀』推古 16 年（608）4 月条に「為_唐客_更造_新館於難波高麗館之上_。」舒明 2 年（631）条に「是歳、改修_理難波大郡及三韓館_。」とあることから「唐館」「新羅館」「百済館」「高句麗館」の四館があったことがわかる。ただし皇極 2 年（642）に百済館は焼失しているため、孝徳朝難波では三館のみが確認できる。
10. 『書紀』推古 21 年（619）11 月条「自_難波_至_京置_大道_。」白雉 4 年（653）6 月条「修治_処々大道_」にみえ、また近年大和川今池遺跡から 7 世紀中頃に造営された幅約 17 m で下ツ道・山田道に匹敵する道路遺構が検出された。その遺構は豊碕宮の中軸上に宮の南側に向かって伸びていることも確認された。
11. 『日本書紀』大化 3 年（647）条「工人大山位倭漢直荒田井比羅夫、誤穿_溝瀆_、控_引難波_、而改穿疲_労百姓_。」白雉 4 年（653）6 月条「修治_処々大道_」
12. 『日本書紀』斉明 2 年（656）条「是歳。於_飛鳥岡本_、更定_宮地_。時、高麗・百濟・新羅、並遣_使進_調。爲張_紺幕於此宮地_、而饗焉。遂起_宮室_。天皇乃遷。號曰_後飛鳥岡本宮_。於_田身嶺_、冠以_周垣_。田身。山名。此云_太務_。復於_嶺上兩槻樹邊_起_觀。號_爲兩槻宮_。亦曰_天宮_。（中略）酒使_水工穿_渠。自_香山西_、至_石上山_。以_舟二百隻_、載_石上山石_。順_流控引、於_宮東山_。累_石爲_垣。時人謗曰、狂心渠。損_費功夫_、三萬餘矣。費_損造_垣功夫_、七萬餘矣。宮材爛矣。山椒埋矣。又謗曰。作_石山丘_。随_作自破。若據_未_成之時_、作_此謗_乎。又作_吉野宮_。災_岡本宮_。」
13. 「倭京」の用語は宮都が難波や近江に所在した時にのみ用いられる用語で正式には「京」「京師」と称されるのであるから特別な史料価値を与えることができない。」（湊哲夫「倭京論の再検討」（『立命館大学考古学論集』1 号、1997 年））「孝徳から天武即位以前の「倭京」、すなわち「ヤマトのミヤコ」は七世紀に入ってから歴代天皇の宮室が集中的に営まれた飛鳥を中心とする一帯をまだ漠然と指すものとし、明確な範囲は存在しない。」（岸俊男「倭京から平城京へ―生活空間としての「京」―」（『日本古代宮都の研究』岩波書店、1988 年、初出 1982 年））「すでに宮・宅・寺・市などの集合体であり、条坊地割はまだ施行されてなく、大王宮への集中度は弱くその範囲は飛鳥を中心とする漠然とした地域であり、プレ都城段階といえる。」（仁藤敦「倭京から藤原京へ―律令国家と都城制」（『古代王権と都城』吉川弘文館、1998 年、初出 1992 年））「斉明朝の一連の飛鳥開発などから歴代の宮室の集中、それに伴う豪族・庶民の集住、寺院の建立、官の施設の造営などによって、一定の都市的景観をもち京域をもった倭京が斉明朝に形成されていった。」（今泉隆雄「飛鳥須弥山と斎槻」（『古代宮都の研究』吉川弘文館、1993 年、初出 1992 年））「推古朝頃から四つの衢により区画された四至京制が存在し、それを倭京の実態と捉えている。」（前田晴人「倭京の実態についての一試論」（『日本古代の道と衢』吉川弘文館、1995 年、初

出 1985 年))「狭義の飛鳥及び小墾田周辺を中心として、東は山田寺、西は軽市、南は観覚寺遺跡（高取町）、北は藤原宮下層遺跡周辺を基本とし、時代によってそれに百済大宮・百済大寺周辺などが加わるなどの伸縮が見られる。但し、その実態はこの範囲内全般が等しく都市化はしてなく、あくまで、諸施設がブロック的に存在する程度のもの」（古市晃「飛鳥空間構造と都市住民の成立」（『日本古代王権の支配論理』塙書房、2009 年））

14. 黒埼直『飛鳥の宮と寺』（山川出版社、2007 年）
15. 木下正史「水落遺跡」『歴史考古学大辞典』（吉川弘文館、2007 年）
16. 今泉隆雄「飛鳥の漏刻臺と時刻制の成立」（『古代宮都の研究』吉川弘文館、1993 年）
17. 『日本書紀』天武元年 5 月条「或有人奏曰、自近江京、至于倭京、處々置候」
18. 『扶桑略記』天武 15 年条「（大友太政）大臣家地造御井寺、今三井寺也」
19. 首都が大津に遷都された頃（667）に爆発的に多量の須恵器が生産され、壬申の乱頃（672）を境として急激に生産規模を縮小
20. 林博通「推定大津京域における発掘調査」（『大津京跡の研究』思文閣出版、2001 年、初出 1984 年）
21. 前掲 6 参照



【図 1】飛鳥と周辺地域

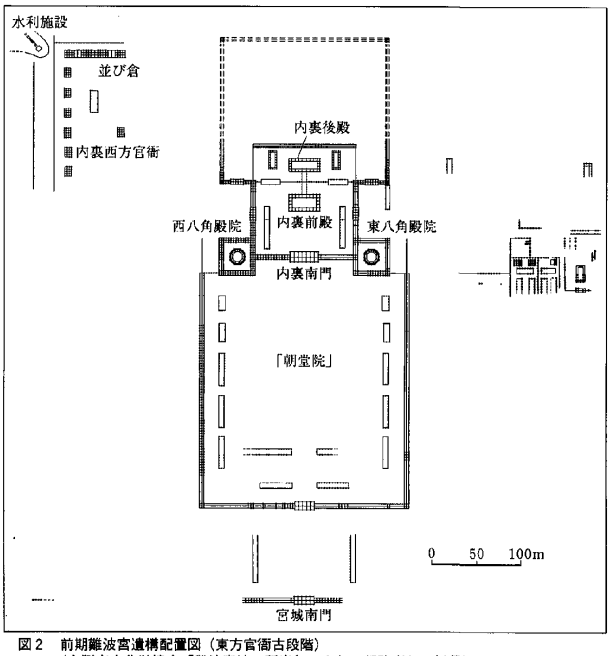
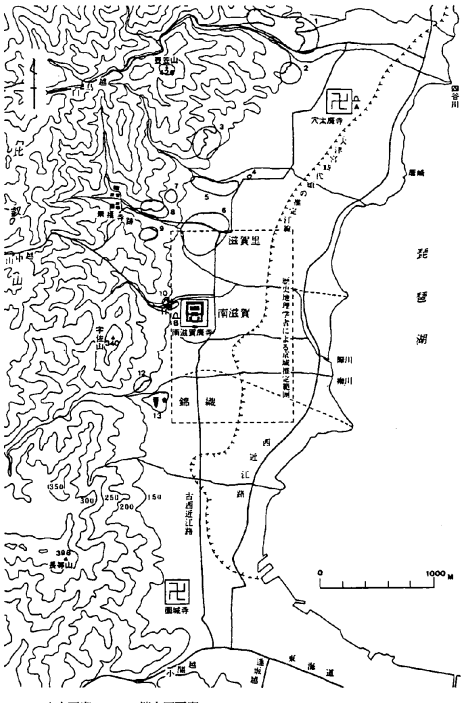


図２　前期難波宮遺構配置図（東方官衙古段階）
（大阪市文化財協会『難波宮址の研究』15より一部改変して転載）

【図 2】難波長柄豊碕宮



【図 3】近江京

引用図

【図 1】滋賀県立安土城考古博物館「仏法の初め、茲より作れり―古墳から古代寺院へ」2008 年、21 ページ
【図 2】古市晃「孝徳朝難波宮の史的意義」（『日本古代王権の支配論理』塙書房、2009 年、初出 2002 年、252 ページ）
【図 3】林博通「推定大津京域における発掘調査」（『大津京跡の研究』思文閣出版、2001 年、40 ページ）

ふるうち　えりこ／お茶の水女子大学大学院　人間文化創成科学研究科　比較社会文化学専攻　2 年